

あたらしい短歌と文章 **その2**

あたらしい文章 -文章の革新-

分かりやすい文章へ

明治時代の日本では、紙に書いた文章は表現がこっていて、口で話すよりもずっとむずかしいものでした。そこで、どんな書き方をすれば、書いた人の気持ちをうまく伝えることができるか、小説家や学者が研究していました。

写生文を作ろう

子規も、この問題をどうやって解決しようか考え、書いたことが目に見えてくるような、分かりやすい「**写生文**」を作ろうとよびかけました。そして、子規が33才の時、写生文の書き方や良い点を紹介した「**叙事文**」という文章を発表しました。

昔の文章と子規の写生文をくらべてみよう

①～③の文章は、子規の「叙事文」に出てくるものです。どれも海辺の景色を紹介した文章です。これらの文章で子規は、①昔の文章と③写生文が、どちらがうのかをくらべてみせました。

① **昔の文章**

山水明媚風光絶佳、殊に
 空气清新にして気候に変
 化少きを以て遊覧の人養
 痾の客常に絶ゆる事なし


うわー、
 むずかしくて
 どういう意味なのか
 分からないよ。



② **分かりやすいかんたんな表現で書いた文章**

須磨は後の山を負い播磨灘に臨み
 僅かの空地に松林があつてそこに
 旅館や別荘が立つて居る。砂が白
 うて松が青いので実に清潔な感じ
 がする。海の水も清いから海水浴
 に来る人も多い。


少しかんたん
 になったね。
 風景を遠くから
 ながめている
 感じがするね。



③ **作者が見たこと・感じたことを伝える工夫をした文章(写生文)**

…それから浜に出て波打ち際をざ
 くざくと歩いた。ひやひやとし
 た風はどこからともなく吹いて来
 るが、風というべき風は無いので
 海は非常に静かだ。

作者といっしょに
 歩いている
 みたいだね。



写生文の勉強会

子規は33才の時、俳句や短歌の仲間たちと写生文の勉強会を開きました。この会は、子規が「文章には山（もりあがるところ）がないといけない」と言ったことから、「山会」と呼ばれました。

山会は、子規が亡くなった後も、仲間たちによって続けられました。夏目漱石が、デビュー作の『吾輩は猫である』を初めて発表したのも、この山会でした。

自分が思っていることを分かりやすく、そしておもしろく伝えるのが写生文なんだよ。



かわひがしへき ごとう 河東碧梧桐あてのはがき



▲子規が仲間の河東碧梧桐に「山会を延期します」と連絡したはがきです。実物と同じ大きさです。

の 更^{さら}延^{えん}山
 事^{こと}に 期^き会
 期^き 又^{また}之^の廿^{にじ}
 上^{かみ}日^{じつ} 延^{えん}処^{ところ}九^く
 根^ね未^み 期^き 日^{にち}
 規^き岸^ぎ定^{てい} 二^に



写生文は、今わたしたちが書いたり読んだりしている文章の始まりでもあります。昔の文章はむずかしい表現が多かったけれど、子規がよびかけた写生文は分かりやすく、たくさんの人が読んだり書いたりすることができました。